

洋10-155 (ショートコメント)

「RED」 ★★

2010 (平成22) 年12月16日鑑賞<角川映画試写室>

監督：ロベルト・シュヴェンケ

フランク・モーゼズ (元CIA超極秘任務専門のエージェント) / ブルース・ウィリス

ジョー・マシスン (フランクの元上司) / モーガン・フリーマン

マーヴィン・ボッグス (フランクの元同僚かつ宿敵) / ジョン・マルコヴィッチ

サラ・ロス (年金課でフランクを担当する女性) / メアリー＝ルイズ・パーカー

ヴィクトリア (元MI6の女スパイ) / ヘレン・ミレン

ウィリアム・クーパー (CIAの若き捜査官) / カール・アーバン

イヴァン・シモノフ (旧ソビエト連邦のスパイ) / ブライアン・コックス

ロバート・スタントン (アメリカ合衆国副大統領) / ジュリアン・マクマホン

シンシア・ウィルクス (CIA作戦本部副部長、クーパーの上司) / レベッカ・ピジョン

記録保管室のヘンリー (CIAの記録保管室の番人) / アーネスト・ボークナイン

アレクサンダー・ダニング (政界と癒着している軍需産業の社長) / リチャード・ドレイファス

ガブリエル・シンガー (フランクと同じ暗殺リストに載る男) / ジュームズ・レマー

2010年・アメリカ映画・111分

配給/ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン

◆ 『RED』というタイトルからは「赤」としか連想できないが、これはRetired (引退した)、Extremely (超)、Dangerous (危険人物) の頭文字を取ったもの。つまり本作は、元CIA超極秘任務専門のエージェントであったフランク・モーゼズ (ブルース・ウィリス) を中心とし、その元上司ジョー・マシスン (モーガン・フリーマン) や同僚で宿敵だった男マーヴィン・ボッグス (ジョン・マルコヴィッチ)、更には元MI6の女スパイ、ヴィクトリア (ヘレン・ミレン) や何と旧ソビエト連邦のスパイだったイヴァン・シモノフ (ブライアン・コックス) などが、すべて今やリタイヤした危険人物として登場し活躍するドタバタ劇。

◆ もちろんストーリー構成にはそれなりの軸が必要。そこで、本作が設定する軸のキーポイントは、映画中段に登場するフランク他9人の名前が記された暗殺リスト。そして、キーマンはアメリカ合衆国副大統領であるロバート・スタントン (ジュリアン・マクマホン)。

やたら多くの人物が登場し、舞台もあちこちに移動、そして銃弾もド派手に飛び交うが、私の評価としてはそれに見合うだけのワクワク感があまりないから、作品の出来としてはイマイチ。

◆ 映画冒頭、今はCIAを引退し一人静かに暮らしているフランクが、年金課の若い女性サラ・ロス (メアリー＝ルイズ・パーカー) と毎日電話での会話を楽しむ風景が登場する。この2人は会ったこともないようだが、サラの方も少しだけ想像力をたくましくしながらフランクとの会話を楽しんでいるようだ。したがって、微笑ましいと言えば微笑ましいが、なぜ今頃になってフランクは老いるの恋を？

私の目にはサラがそれほど魅力的な女と思えないため、そんな恋模様の展開が少し不自然。さらに、暗殺リストの謎とそれへの副大統領の関与を軸とし、政界と癒着している軍需産業の社長アレクサンダー・ダニング (リチャード・ドレイファス) まで登場させて、現代アメリカの複雑な軍需産業の実態を暴き、また若きCIA捜査官ウィリアム・クーパー (カール・アーバン) やその上司シンシア・ウィルクス (レベッカ・ピジョン) を登場させてCIAの内部事情まで描くのであれば、フランクとサラとの年甲斐もない中途半端な恋愛模様(?) など不要では？

◆ 宇津井健などが登場した『死に花』(04年)は、4人の70歳超老人軍団を中心とした、悪ガキ顔負けのカッコいい銀行強盗を描いた面白い映画だった(『シネマルーム4』338頁参照)が、そのテーマはゼニではなく、生き甲斐の追求。それは本作も同じだが、リタイア組をたくさん登場させすぎたためか、ジョーの扱いが少し変。だって、80歳を過ぎ、末期の肝臓ガンを患っている男という設定にモーガン・フリーマンはあまりにも元気そうだから。また、彼を映画中段であっさり殺してしまう脚本は、いかがなもの？

本作ラストのハイライトシーンでは、ヴィクトリアの腹部を銃弾が貫いたにもかかわらず命に別状がないうえ、かつての心の恋人だったらしいイヴァンとうまくやっていく姿と比べると、あまりにもアンバランスでは？

2010 (平成22) 年12月17日記